日本－ブラジル国際シンポジウム

都市の近代化と現代文化　開催概要

※シンポジウム当日に配布した
レジュメの内容を再録しています。

日時

2008年10月10日～11日

会場

ラテンアメリカ記念センター会議場（サンパウロ市）

実行委員会

Regina MEYER
（委員長及びブラジル側コーディネーター、サンパウロ大学教授）

藤原学（日本側コーディネーター、京都大学助教）

Andrea Yuri FLORES URUSHIMA（京都大学研修員）

Raquel ABI-SÂMARA（元国際交流基金フェロー）

Murilo JARDELINO（Institutional Relations Representative）

共催者

財団法人啓明社

ブラジル高等教育支援・評価機構（CAPES）

サンパウロ研究財団（FAPESP）

国際交流基金

駐日ブラジル連邦共和国大使館

COSACNAIFY

ロゴ作成

Andrés SANDOVAL

Sílvia AMSTALDEN

同時通訳

Yuko TAKEDA

Yutaka ISODA

協力者

山下貴子（京都外国語大学）

川崎修良（京都大学）

テーマ

このシンポジウムには二つの課題がある。一つは、これまで異なる分野に位置づけられてきた建築と文学の学問の境界を超えることである。もう一つは、現代の日本とブラジル両国の互いに異なった都市文化の由来を探ることである。

「近代化」というテーマは、建築と文学、日本とブラジル、いずれの関心からも興味あるテーマである。近代の建築と文学は共に、絶えず変化し新しくなっていく都市を表現することに挑んできた。遠く離れた異文化の地で試みられたこの芸術活動を通して、それぞれの国を見つめ直すとき、その特徴や問題点が浮き彫りになるであろう。

文学や建築が作り出した新しい形態は、都市において発展し、あるいは逆にそれが都市を発展させてきた。都市は新しい文化によって活気づけられると同時にそれを消費し、古くさいものとしてそれを捨て去り、また新しいものを求める。都市のこの運動は一人の指導者、一つの指導原理によってコントロールできるものではない。それが制御できないゆえに、都市は常にわれわれを魅了し、そして問題を突きつけるのである。

このシンポジウムには日本とブラジル両国から建築と文学の専門家が集い、こうした問題を自由に議論する。「都市」や「近代」といったテーマに早急に結論を下すことが目的ではない。互いを鏡として、日本とブラジルが、そして建築と文学が、同じ問題を共有し、その解決に向けて新たな知の礎を築くことが目的なのである。この礎は、文字通り、両国の関係をより強固なものとするだけでなく、世界中で今後ますます深刻化するであろう都市問題に対しても多大な学術的意義を持つであろう。

プログラム

■ 10月10日（金曜日）

09：30～10：00　**挨拶**

10：00～10：30　**基調講演：Ruy Ohtake**（建築家）

10：30～12：00

セッション1　近代：日本とブラジルの鏡像

座長：**Regina MEYER**（サンパウロ大学）

Paulo FRANCHETTI（カンピーナス大学）

『ブラジルの俳諧文学』

この講演では、20世紀に俳諧の型に適合させる様々な方法から生じた問題に焦点を当て、俳諧がブラジル文学に取り込まれていく近年の歴史を紹介する。

◆パウロ・フランケッチ

カンピーナス大学言語研究所言語理論科教授。文学理論専攻。『郷愁・追放・憂鬱――カミロ・ペッサンヤを読

む』(サンパウロ、2001)、『此処で鳴いている鳥――ロマンティシズムとモダニズムの間のブラジル詩』(リスボア、2005)、『ポルトガル語とブラジル文学の研究』(コチア、2007)、『カミロ・ペッサンヤのエッセンス』(リスボア、2008)、『俳諧――アンソロジーと歴史』(監修、1994)など。2002年よりカンピーナス大学出版部を統括。

藤森照信(東京大学)

『丹下健三とオスカー・ニーマイヤー』

世界の20世紀建築において、源流の一つとなったのはル・コルビュジエである。ブラジルではオスカー・ニーマイヤー(1907〜)がル・コルビュジエに学び、日本では丹下健三(1913〜2005)が高校生時代にル・コルビュジエのソヴィエト・パレス案と出会って建築家の道に進んでいる。ル・コルビュジエ以後の建築をどう作るかが、ニーマイヤーと丹下の共通の課題となる。ル・コルビュジエには、強く望みながらできなかった建築的テーマが一つあった。それは、鉄とコンクリートという新しい技術を駆使する構造表現である。近代技術によるダイナミックな表現を、ソヴィエト・パレス案(1931)で提案したが、ついに実現には至らなかった。

ソヴィエト・パレス案の構造表現は、①本来なら建物の下方にあるべきアーチを宙空高く突き出し、②そこからワイヤーをたらして屋根を吊る。この二つが勘所であったが、残念ながら実現しなかった。実現しなかったが、その後の歴史を見ると、地に落ちた一粒の麦となっている。とりわけそそり立つ放物線アーチの形はそうであった。まず、A・リベラがローマのエウルの計画(1942)で放物線アーチを使い、つづいてニーマイヤーがパンプーリャのサン・フランシスコ礼拝堂(1943)で史上初の放物線アーチのシェル構造を実現する。そして丹下である。戦後すぐの1948年、広島平和記念カトリック聖堂のコンペが開かれた。丹下案を見ると、放物線アーチのシェルといい、鐘楼の上広がりの形といい、5年前に地球の反対側で実現した聖フランシス教会に学んだことがよく分かる。コンペの審査において、丹下案は優秀で一等当選になるかと思われた。しかし、教会側審査員が猛烈な反対をする。「海外の同類の聖堂建築が全世界のカトリック方面からの強い反感と拒否にあったので、この提案を広島記念聖堂として実施することは不可能と思う」。

「海外の同類」とは、もちろんニーマイヤーの聖フランシス教会にほかならない。教会側の反対により、丹下案は落選した。丹下は、放物線アーチと上広がりの当コンビがよほど気に入っていたらしく、1954年の清水市庁舎ではついに実現している。

以上のように、戦後の丹下健三は、サンパウロの聖フランシス教会に強く影響されていたのである。そして、丹下は1964年、東京オリンピックプールにおいて、アーチと吊りの構造表現をついに実現した。

◆フジモリ・テルノブ

建築家、建築史家。東京大学教授。東北大学工学部建築学科卒業。東京大学工学博士。専攻は建築史・生産技術史。『明治の都市計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険　東京編』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞、サントリー学芸賞、『ニラハウス』(1997)で日本芸術大賞、等受賞。その他のおもな著書に『看板建築』(三省堂、1999)、『昭和住宅物語』(新建築社)、『日本の近代建築』(上下、岩波新書)等がある。

12:00〜13:30　**昼食**

13:30〜15:30

セッション2　メトロポリスの生活

座長:**Jo TAKAHASHI**
(国際交流基金サンパウロ事務所)

Willi BOLLE(サンパウロ大学)

『アマゾンのメトロポリス・ベレムの近代化の特徴』

1900年頃のゴム景気が最高潮の時期に、アマゾン地方の主要都市ベレンは、“アメリカ大陸のパリ”となることを夢見るほどの富が蓄積されていた。しかしながら、その夢は突然崩れ、近代化事業は、1912年、世界市場におけるゴム価格の下落により不振に陥る。1920年から1960年の40年間に再興の努力がなされるが、不況、衰退の時期が続く。1960年代初頭より、ベレン－ブラジリア間の鉄道開通と大規模な開発計画(アマゾン横断道路、鉱山開発、水力発電ダム)によって新たな近代化の波と人口の爆発的増加がもたらされる。この人口増加は、30万の一都市を半世紀で200万の大都市に変化させる。我々はこの近代化―衰退―新たな近代化の流れの全体もしくは近代化衰退の時期を、Dalcídio Jurandirの小説『グラン・パラーのベレン』(1960)で描かれた状況と21世紀はじめの10年間

のベレンの様相との比較で考察する。

◆ウィリー・ボーレ

サンパウロ大学教授、文学および歴史学専攻。ドイツとブラジルの近代化をテーマにしている。近年はブラジルの場所論に関心を持っている。サンパウロ大学卒業、独ボッフム大学文学博士。『近代メトロポリスの表情』(サンパウロ大学出版会、2000, 2ed)『grandesertao.br：ブラジルの成長の物語』(サンパウロ、2004) ヴァルター・ベンヤミン『パッサージュ論』ブラジル版出版の代表者。近著に『アマゾン――ユニヴァーサル・リージョンと世界劇場』(共著)。

藤原学(京都大学)

『都市空間の中の私――谷崎潤一郎『秘密』の空間論』

谷崎潤一郎(1886－1965年) の小説「秘密」(1911年は、一人の男を主人公にしている。東京に生まれ育ったその男は、それまでの交際をすべて絶ち切り浅草に隠棲するが、女装して街を 徘徊したり、かって関係があった女と、互いの現在の境遇などを秘密にしたまま再び関係を持つ。その際、女は男に目隠しをして人力車に乗せ、自分の住まいをわからせないように、わざと遠回りをさせる。明治末期の浅草を中心とした東京下町を舞台にして、男と女は互いの秘密を探り合い、男が女の住まいを発見したところで小説 は結ばれる。

従来の「秘密」研究では、近代大都市における個人の匿名性との関連で主人公の行動が論じられることが多かった。都市に集う人々を巨視的に「大衆」と捉えるならば、その中の個人は確かに匿名の存在と見なせるが、個々人に着目するならば、それぞれが絶えず自己同定を行いながら、都市の中で活動しているはずである。『秘密』の主人公の女装も、みずからの性癖を満足させるための行為であり、自己のアイデンティティを確認する行為に他ならない。秘密を持ったまま女との関係を楽しむのも、同様である。従って『秘密』は、匿名性という観点からではなく、そう振る舞うことが可能な都 市空間においてはじめて成立する自己同定のあり方を示していると考えられる。本講演ではこうした観点から、建築・都市史的な史料を援用しながら、具体的な明治期東京の都市空間との関係で『秘密』を論じる。従来、都市空間における個人のあり方は、匿名性や孤独といったネガティブなものとみなされることが多かったが、むしろそこに積極性を見いだし、都市空間に生きる個人のあり方に新たな意味を呈示することを目的としている。

◆フジワラ・マナブ

京都大学大学院人間・環境学研究科助教。博士(人間・環境学)。東京工業大学工学部建築学科卒業、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程修了、同博士後期課程単位認定退学。日本学術振興会特別研究員を経て、現職。建築論および日本近代学専攻。谷崎潤一郎の小説に描かれた空間の意味について研究を行っている。

Regina Maria PROSPERI MEYER(サンパウロ大学)

『21世紀最初の10年のサンパウロ』

大都市サンパウロは、この21世紀最初の10年に、自らの都市問題においてその社会の効率の悪さを、隠すことのできない形で示している。主要都市であり都会であるサンパウロは、その沿革からみると、省察の対象でなく、都市の計画性はなかったことが頻繁に認められる。サンパウロには都市計画そのものが欠けているという主張が常に繰り返される。しかしながら、学術的な数多くの研究ではその焦点にサンパウロの発展や、この単純な解釈とは矛盾する様々な計画がある。仮に、今日この大都市が無秩序で失政の明らかな例であるとしても、そこに都市計画がなかったとは考えられない。サンパウロ市の今日の困難な局面において、それが特殊な都市化の当然の結果のもとにあることは十分明らかだ。この独特の形態は、急速な発展の初期から、多くの仲介業者を通じた民間の不動産会社とサンパウロの公的権力との間の交渉を基にして創り上げられた。

都市開発の主な方針は、常に不動産分野での違法措置にあふれ、そして公的権力の怠慢の表れであった。ここでは、その妥当性や規律と指導性のある計画内容、もしくは専門的な行政指導による公的権力の責任の度合いを分析することはしない。だが、サンパウロにとって重要な時期であるこの過去40年間に、社会の集団的関心を基にした町の建設とその用途において、合理的な管理形態創設の失敗を再び見たことが十分確認できる。

法や規則を通じて、かすかな“秩序に対する観念”は徐々に広がり、小規模な戦いでは勝利したものの、明らかに、戦争では敗退した。都市の構築プロセスにおいて、永続的な拡大、無計画な発展、お手本のような法律の乱用の原理が勝っていた。特に学術的文脈で書かれた豊富な文献には、簡潔に、民間と政府の、節度のな

い都市化の一般的な習慣が描写されている。Manfredo Tafuriの主張“発展する都市はその構成においてバランスを持たない”はサンパウロのその発展に強い確証を示している。

◆レジナ・マリア・プロスペリ・メイヤー

サンパウロ大学建築都市計画学部教授。建築学及び都市計画学博士。ブラジリア大学建築都市計画学部卒業、ロンドン大学大学院AAスクール修士課程修了。サンパウロ大学大学院博士課程修了。2006年サンパウロ大学大学院ポスドクを経て、現職。専門分野は建築学及び都市計画。現在の研究テーマは「1950年代の大都市の都市計画」。

15:30〜15:45　**休憩**

15:45〜17:45

セッション３　都市の文学者

座長：**Manuel da Costa PINTO**（TV Cultura）

Fernando BONASSI（作家）

『ラテンアメリカでの都市文学の創作』

現代ブラジル文学の作家の一人である私は、第一世代のブラジル人作家が置かれた状況について話します。彼らは、文化産業において初めての存続可能な存在となったので、これ以上二重の仕事を持つ必要はなかったのです。慣例を除いて、初めてすべての階層のために創り出される文学が、現代には、存在する。しかしながら、「決してこれほど枠に入れられたことはなかったが。――さあどうだか？――飼いならされた人たちよ。」

◆フェルナンド・ボナシ

映画・テレビ作家、劇作家、映像作家と小説家。『発奮するモレークィの世界宣言』（コサク＆ナイフ）と『サンパウロ／ブラジル』はJabuti賞を受賞。エクトル・バベンコ監督者と協力した映画作家の『カランデイル』はTAMのブラジル映画賞を受賞。『郊外――婚姻犯罪と路上に集まった100個の物語』の小説はハンブルクのDeutsches Schauspielhausに著作権が押さえられた。

細川周平（国際日本文化研究センター）

『日系移民のモダン文学――1920年代〜30年代の新聞小説から』

日系ブラジル人の活字資料は1910年代末から残されている。日本語新聞は俳句や短歌はもちろんのこと、短編小説を掲載し、作者は社会主義の理想が述べたり、性のはけ口を求めた。職業作家は一人もいない。文学的な成熟はあまりないかもしれないが、移民の生活ぶり、考え方を教えてくれる。中には農村からサンパウロ市にあてもなく出てきたいわゆる「バガブンド」の生活を描いたものもある。同時代の日本の文学的流行から多くを得ながら、愛好家は新たな国を舞台に創作する楽しみを味わった。彼らが本国から持ってきた文化資産の表現と見ることができる。日系共同体は圧倒的に農村人口が多く、大半の小説も農村を舞台にしたが、少数ながら都会を描いたものもある。本発表ではそのなかから、日本人使用人と屋敷の持ち主の観念的な会話からブルジョアの腐敗と没落を描いた坂井田人間（さかいだにんげん）「狂伯爵」（1923年）と、サンパウロ市の日本人モダンガールで、トマトで儲けた日本人の情婦ルリ子（典型的なフラッパー）を主人公に、性とモダニズムを新感覚派の文体で描いた園部武夫（そのべたけお）「賭博農時代」（1932年）を紹介する。

◆ホソカワ・シュウヘイ

1955年大阪生まれ。専門は近代現代音楽史、日系ブラジル文化研究。国際日本文化研究センター教授。1989年、東京芸術大学音楽研究科にて博士号取得。主著に『サンバの国に演歌は流れる』（1995）、『シネマ屋ブラジルを行く』（1998）、『遠きにありてつくるもの』（2008）。現在は明治以降の日本音楽史を執筆中。

Mauricio SILVA（UNINOVE大学）

『都市についての著述――ブラジル前近代主義文学における近代化と都市の重要性』

19世紀から20世紀にかけて、ブラジルの都市の様相は、特に州都サンパウロおいて、構造変化（工業化、近代化、都市一極集中）と関連し一連の変革をこうむる。つまり、ある種の「空想都市」――日常的には舗装された道が、そして都市空間の幻想が――建設された。これはこの時代の文学の特別なテーマのひとつとなるであろう。学際的な方法から、科学的研究の二分野（文学と歴史）が結び付けようとされ、方法論上の前提として精神史の概念が使われるであろう。それにより文学のこれまでとは異なる方法の実現が可能となる。文学フィクションは、つまり、都会をめぐって想像力を生み膨らませるのに役立つだろう。これにより、一般的な空想の型にはまった考えの文学の再生産と、

フィクションがいかに政治行政の事業、特に時の政治家のリオデジャネイロ再開発に関連した事業に、観念的な支えを与えていたかがよりよく理解できる。最終的に、19世紀から20世紀にかけてのブラジル文学による都市イメージの構想は、都市現象についてのネガティブな象徴の、そして都会の現実に結びつく侮蔑的な“形”の兆候となる。それらすべては、都会の新たな概念が形成されるもととなり、その概念は何度もモラルの廃頽の最大の象徴、また都会の人間関係の新たなモデルとなっていた。

◆マウリシオ・シルヴァ

ノーヴィ・デ・ジューリョ大学及び大学院卒。サンパウロ大学大学院博士課程修了、同大学院ポスドク。現在、ノーヴィ・デ・ジューリョ大学大学院主任教官。雑誌Dialogia編集者。

■ 10月11日（土曜日）

10：00〜12：00

セッション4　都市イメージの生成

座長：**藤原学**（京都大学）

塚本由晴（東京工業大学）

『建築のふるまい学』

建築には三つの「ふるまい」が関わっている。一つは人間のふるまい。第二はそれを取り巻く光や影、風のうつろいといった自然のふるまい。第三に都市において他の建物が作り出す文脈が変化するというふるまい。本講演では、こうしたふるまいを有機的に構成し、価値ある建築の設計を目指していることを紹介したい。

◆ツカモト・ヨシハル

1992年、貝島桃代と設計事務所アトリエ・ワンを設立し、建築家として設計活動を行う一方、1998年より、東京工業大学大学院理工学研究科建助教授、准教授として建築意匠の研究教育も行っている。現代都市における居住のあり方や都市形態のデザインなどに対し、様々なメディアに論考を発表している。

井上章一（国際日本文化研究センター）

『京都と鎌倉――歴史のなかの二都物語』

◆イノウエ・ショウイチ

1955年に京都で生まれました。1974年には京都大学へ入り、修士課程にいたるまで6年間、建築学の勉強をしています。その後は、人文科学へ転身しましたが、建築への関心を活かした仕事にも、たずさわってきました。とりわけ、建築の評価が、時代状況に左右される様子には、多大な関心をよせてきたつもりです。『つくられた桂離宮神話』（1986年）、『法隆寺への精神史』（1994年）、『南蛮幻想』（1998年）は、その成果だと言えましょう。今は、伊勢神宮についての評価史を、おいかけています。また、これとはべつに、政治的な権力と建築のかかわりにも、興味をもってきました。『戦時下日本の建築家』（1995年）が、その代表例です。今回は、そちらの副産物めいた報告を、させていただきます。

Hugo SEGAWA（サンパウロ大学）

『ブラジルの新都市――仮の景色』

◆ウゴ・セガワ

サンパウロ大学準教授、建築家と建築史家。ブラジル及びラテナメリかの近現代建築をテーマしている。サンパウロ大学卒業、建築と都市計画学部サンパウロ大学博士。スペイン、アルゼンチン、パナマと日本（東京理科大学）で客員準教授として勤められた。DOCOMOMO諮問機関の委員。DOCOMOMOブラジルの代表者。『The journal of Architecture』（ロンドン、RIBA）の地方編集者。『ラテンアメリカの現代建築』（バルセロナ、2005）『ブラジルに建てられた建築1900－1990』（2002）、『大都市の プレリュード』（2004）など。

12：00〜13：00　**昼食**

13：00〜15：00

セッション5　日本の美意識

座長：**Minoru NARUTO**（サンパウロ大学）

真銅正宏（同志社大学）

『散策記という文学ジャンル――永井荷風「日和下駄」と東京』

永井荷風の「日和下駄」という、東京の散策記を手がかりに、東京が近代都市としてどのように成長したのか、また、それを、江戸空間の喪失として荷風がいかに惜しんだのか、について考察する。併せて、「散策記」という分野がどのようなシステムで文学ジャンルとして取り扱われるのかについても触れたい。

◆シンドウ・マサヒロ

同志社大学文学部国文学科教授。文学修士。神戸大学文学部国文学科卒業、同大学院人文学研究科修士課程修

了、同博士後期課程単位取得満期退学。日本近代文学専攻。周辺諸ジャンルと日本近代学との関係や、文学作品が成立する状況や過程を現在の研究テーマとしている。著書に『永井荷風――音楽の流れる空間』(1997)、『ベストセラーのゆくえ――明治大正の流行小説』(2000)、『食通小説の記号学』(2007)など。

Celina KUNIYOSHI(ブラジリア大学)

『ブラジルにおける日本趣味』

ヨーロッパとアメリカ合衆国のアートにおけるジャポニズムとを比較する観点から、ブラジルでのジャポニズムの軌跡(1870－1950)を紹介し、近代的一美学の誕生を後押しする現象である以上に、それがいかにはるか遠く隔たった国と民族の風変わりな一連の構造を伴ってきたかを示す。それは時に魅力的で、他を戸惑わせ、そして結局相容れない。ブラジルのアートでは日本のアートの直接的影響を表すものはほとんどない。一般的に日本のアートはヨーロッパやアメリカのアートに影響を及ぼし、そこからブラジルへたどり着いており、ブラジルの前衛芸術の形成を導くものではない。しかし、グラフィックアートや装飾アート、建築様式、19世紀後半から20世紀初頭の文化芸術表現における変化や印象主義は、表象された日本を反映している。その日本とは、1870年から1950年の時期、日系ではないブラジル人によって出版された日本への旅行記のなかのものである。これが今回の講演でのテーマである。

◆セリーナ・クニヨシ

ブラジリア大学教授、歴史学、考古学、博物館学専攻。ブラジルとメキシコにおけるジャポニスムについて研究している。サンパウロ大学卒業。サンパウロ大学博士。『ブラジル日本人移民の建築』展コーディネーター。『モジ・ダス・クルーゼスのカザロン・ド・シャ』(1984)『日本のイメージ――旅行者のユートピア』(1997)

稲賀繁美(国際日本文化研究センター)

『日本趣味から中世趣味へ――東洋美学の形成と近代都市文化の危機意識』

19世紀の後半から、日本の美意識は欧米で高く評価され、いわゆる日本趣味の系譜をつくりあげた。だがこれに平行して日本では西洋を模倣した都市文化が導入された。20世紀に入ると、日本では、西洋都市文化の浸透とともに、それへの反動とみなされる美意識が復権される。中世に美の基準を見出そうとするこうした潮流は、やがて30年代には東洋美学をめぐる学説の登場に繋がる。その典型が、南米旅行で禅の画家、雪舟を取り上げた島崎藤村の場合といえよう。本講演では、この潮流を簡単に鳥瞰し、東洋美学の形成に内在する危機意識を摘出したい。島崎藤村の場合については、追って10月16日のサンパウロ大学における講演で、取り上げることとしたい。

◆イナガ・シゲミ

国際日本文化研究センター教授　1957生。文化交流史。東京大学教養学部卒業。同大学院人文科学研究科・比較文学比較文化博士課程単位取得退学、パリ第7大学新制度博士課程終了。文学博士。サントリー学芸賞、倫雅美術奨励賞、渋沢クローデル賞、和辻哲郎文化賞など受賞。和文著書に『絵画の黄昏』(1997)、『絵画の東方』(1999)、編著に『異文化理解の倫理にむけて』(2000)『伝統工藝再考――京のうちそと』(2007)、欧文編著に *Crossing cultural Borders*(2001)、*Traditional Japanese Arts and Crafts in the 21st century*(2007)ほか。韓国学術誌責任編集にDepiction and Description, Morphology of Modern Visuality and Marketplace in Transition, *The Art History Forum*, No. 20(2005).

15:00～15:15　**休憩**

15:15～17:15

セッション6　文化混在としての都市

座長：**Jorge Hajime OSEKI**(サンパウロ大学)

鈴木貞美(国際日本文化研究センター)

『日本の都市大衆文化』

冷戦後の今日、情報化と呼ばれる現象を加えながら、大量生産／大量宣伝／大量消費を指標とする都市大衆文化は、ますます世界にひろがりつつある。日本のそれは、1920年代に他の先進諸国とほぼ同時に形成されたが、独自の性格ももっている。ここでは、日本の都市大衆文化の概要と、その独自性を明らかにしてゆきたい。

◆スズキ・サダミ

1947年生まれ。人間文化研究機構国際日本文化研究センター教授。総合研究大学院大学教授。学術博士。1972年東京大学仏文科卒業後、創作、評論活動に従事、東洋大学助教授を経て、1989年より日文研に勤務。日

本近現代の文芸・思想史の再編に取り組み、東アジアにおける知的システムの近代的組み換えをめぐる国際共同研究を推進している。主著に『日本の「文学」概念』(1998)、『梶井基次郎の世界』(2001)、『生命観の探究――重層する危機のなかで』(2007、いずれも作品社)。ほか『日本文芸史――表現の流れ』全8巻(企画編集、河出書房新社、1986－2006)、『わび、さび、幽玄――「日本的なるもの」への道程』(水声社、2006)など単著、編著多数。

Maria Cristina LEME(サンパウロ大学)

『サンパウロ――
メトロポリス建設における外国人の役割』

19世紀末より、外国人はサンパウロの文化、社会、経済、人口の具体的な変化において重要な存在となった。彼らはあらゆる場面に登場し、移民グループはこの町に居を構え、腰を落ち着けた。そしてまた他にも、旅行者がここに一定期間滞在した。これら外国人の存在は、習慣の変化、知識の集約、建築様式に現れる。多くの場合、それは変化を認知させるものの間にある。こうした例において、都市構築の過程で我々はこの思考のインパクトや建築家や都市工学者の計画を特別なものと考えるだろう。建築技術や都市計画のモデルの明確な姿はもともと考案されたものと比べ、しばしば時代を異にして、地域社会のもとあるそれ同様都市に生じたアイデアとも時代を関連させながら、現れる。これは羊皮紙の古文書のようなもので、急速に変化する都市を描写しようとするとき再現され、古きものを新しきものとする。我々はこの最も複雑な描写を見ていくことにする。サンパウロが具体的なあらゆる限界を超えて拡大する都市と考えられるなら、それは都市と地方、中心部と近郊との一体を図っているのだ。外国人の発想とスタイルの影響はサンパウロの一大変革期において明らかであった。新国家体制の時期、サンパウロの中心部と各地区の間を結ぶ大通りの建設が行われた。こうした道路が敷かれた地域では、一、二階建ての家並みは高層建築に建て替えられ、20年後には新たな、そして衝撃的な変身をとげる。道路、橋、高架橋で地域は区切られ、これらはサンパウロの町の道筋や商業活動、社会活動を変えた。こうした変化をもたらす外国人の存在を中心問題とし、都市と都市計画との複雑な関係について語る。

◆マリア・クリスチーナ・レーメ

サンパウロ大学教授。1973年サンパウロ大学建築・都市計画学部卒、同大学にて修士(1982年) 博士課程(1990年) 修了(建築学及び都市工学)。都市計画専攻。ブラジルの都市計画および都市化の起源とプロセスを研究している。サンパウロ大学卒業。サンパウロ大学博士。国立民族学博物館(大阪) 客員研究員(2002)、オックスフォード大学ブラジル学研究所客員研究員(2004)。『ブラジルのアーバニズム 1895－1965』(1999) 編者代表。『ブラジルのアーバニズムのデータベース』プロジェクト(2001)代表。

Andrea FLORES URUSHIMA

『1968年の明治100周年事業――
日本の都市デザインの世界への輸出の始まり』

1968年、日本では明治維新期からの海外交流と開国100周年が祝われた。都市化と建築の形式について、専門的なメディアと政府が一連の記事と報告書を公表した。それらは100年間の桁外れな都市の変化を物語っていた。実際、明治の開国期は、日本の工業化の過程で先進国の知識と技術を吸収する時期と位置づけられ、工業化は日本の生活様式に決定的な変化をもたらした。そして結果的にこの国の都市化の歴史のなかでの一つの重要な時期となる。都市化の形式おいて、外国の型を基にしたものが国内の既存の都市に導入された。日本は、前近代化のその時期、アジアで最も都市化されていると考えられた。とりわけ、21世紀初頭ヨーロッパの国のいくつかでなされた大規模な近代的な都市計画は、中国や朝鮮における日本の植民地化の段階で日本の計画者によって試みられたのだが、実現には及ばなかった。建築の形式おいて、近代的な実験が日本とその植民地で起こった。特に植民地では、それは近代国家のアイデンティティー創出の必要性からであった。日本の建築家が国際的視野を取り入れ始めるのは、建築様式おける日本的近代主義表現の発達以降で、特に第二次大戦直後の時期である。1960年代、日本では経済成長が著しく、都市人口の増加に影響を与え、その結果既存の都市の拡大が起こる。建築様式と都市計画において、日本式建築の近代的表現が都会的規模へと発達し、国際的な認知を得て世界規模で用いられるようなったのがこの時代である。

◆アンドレア・フローレス・ウルシマ

京都大学大学院人間・環境学研究科研修員。博士(人間・環境学) サンパウロ大学建築都市計画学部卒業、京都大学大学院人間科学研究科博士前期及び後期課程修了。ブ

ラジルでは都市計画と開発に従事。国際コンペにおいて建築環境の耐久性のテーマで賞を受け、2006年には第12回国際都市計画史学会IPHSで最優秀修士論文賞を受賞。主な研究分野は近代都市計画の歴史及び都市モデルの重要性と巨大イベントの都市効果。

17:15〜17:30　**閉会の挨拶**

18:00〜19:30　**総括討議**

※本シンポジウムは、日本の現代建築紹介ワークショップと、それを踏まえた日本の建築及び文化に関する国際シンポジウムを行なう「ブラジル・日本国際交流プロジェクト――現代都市文化のビジョン」の一部として実施しました。ワークショップは下記の要領で開催しました。

「日本の現代建築」ワークショップ

●2008年10月9日　午後12時半〜14時
サンパウロ大学建築・都市計画学部
アンフィシアター(部屋番号207)

●2008年10月14日　午前10時半〜12時
リオデジャネイロ連邦大学建築・都市計画学部
アルキメデス・メモッリャ講堂

●テーマ
現代日本における優れた建築家が、設計プロセスと作品実態について発表しました。サンパウロ市及びリオデジャネイロ市にある大学の建築・都市計画学部の学生と、現代の建築生産について討論を行ないました。

●講演者
藤森照信、塚本由晴

●討論者
真銅正宏／藤原学／Andrea Yuri Flores Urushima

●司会(サンパウロ)
Rodrigo Cristiano Queiroz

●司会(リオデジャネイロ)
Guilherme Lassance

●コーディネーター(リオデジャネイロ)
Ronaldo Brilhante